

Wnt シグナル伝達系遺伝子の異常が様々な癌の発生、進展にかかわることがこれまでの数多くの研究で証明されている。一方、近年、異物に対する免疫を担う第一捕体である C1 の構成成分である C1q が Wnt レセプターである Frizzled に結合することによって Wnt シグナル伝達系を活性化し、腫瘍発生にも関係する可能性が示唆されている。本研究では、消化器癌のうち、創薬開発の面でやや遅れをとっている食道癌において、補体が腫瘍に及ぼす影響を調べる目的で研究を行った。その結果、食道扁平上皮癌において C1q の発現と臨床病理学的因子との間に相関を認めるには至らなかったが、ELISA 法では食道癌患者の血清中の C1q 濃度が高い患者で、食道癌の静脈侵襲が有意に高度であった。さらに、補体活性の分解産物である C4d について免疫染色を行ったところ、C4d の発現が弱い群で深達度、リンパ節転移、リンパ管侵襲、進行度が有意に高度であるという結果を得た。本研究では C1q の Wnt 系を介しての癌の進展への関与は明らかとはならなかった。しかしながらそれ以前の発生の段階にかかわる可能性については否定できないものと思われた。また C4d の癌への関与は C1q とは異なる経路を介している可能性が示唆された。

C4d 免疫染色像

